「同類」を「憫笑」するために

――梅崎春生「山名の場合」における「ユーモア」と「ニヒリズム」

渡部裕太

はじめに　「ユーモア」と「ニヒリズム」を生む仕掛け

「山名の場合」は雑誌『新潮』に一九五一年一一月に発表され、翌年四月の『創作代表選集』（日本文芸協会編　大日本雄弁会講談社）に収録された。

この作品について、伊藤整[1]は「ユーモラスな批判を含む日常生活描写としての佳作」と評し、浅見淵[2]は「諷刺味の勝った「大人のメールヘン」的作品」と説明する。いずれも、この作品から「諷刺」的なユーモアを読み取っているものである。また、平野謙[3]は「庶民生活の愚かな風景こそ人間の普遍的なありかたではないか、とする虚無的な人間意識」が根柢にあり、その庶民生活の愚かさに梅崎が「同類意識」を抱いている、と指摘している。

そのような評価をふまえ、高橋啓太[4]は、「山名の場合」を「ボロ家の春秋」や「Sの背中」、「鏡」などとともに「市井小説」と位置づける。それらの作品が「「軽いニヒリズム」を描いているとみなされている」ことを指摘し、「「コミカル」「ユーモラス」といった言葉も「ニヒリズム」と無縁な立場からの評価ではない」とする。その上で「山名の場合」は「自己投影できない〈隣人〉との接触を露わにしているテクストなのだ」と定義づけ、「主体確立の挫折」という「ニヒリズム」的な作品解釈の読み替えをはかっている。

戸塚麻子[5]は、「山名の場合」を「他人との結びつきを得て、生きがいを獲得し、幸福になれるという、従来の梅崎の文学には決してなかった明るく健康的なストーリー」だとする。戸塚によれば、「ユーモア」とは「過酷な現実を切り抜けようとするとき現れる精神態度、現世から自己を切り離し、或いはずらすことによって、自己を相対化し、解放しようとする態度のこと」であり、「ニヒリズム脱出の為に編み出された方法」である。梅崎が「ユーモア（フィクション）」によって「〈憎悪〉による他者との関係の回復という架空の観念を創り出した」のが「山名の場合」だとし、この「フィクション」によって梅崎は創作上の「行き詰り」を乗り越えたと説明している。

戸塚と高橋は、同時代評が読み取ってきたような「ニヒリズム」

の脱色を、それぞれの手法でおこなっている。この取り組みは注目すべきものだが、それ以前に、「山名の場合」が持っている、「ユーモア」や「ニヒリズム」を読み手に想起させる仕掛けを明らかにする必要があるのではないだろうか。

本稿では、梅崎における「行き詰り」とはどのようなものだったのか、そしてそれはいかにして解消されたのか、という、作家梅崎春生にとっての「山名の場合」の価値を確認することからはじめる。その上で「山名の場合」が「ユーモア」「ニヒリズム」を生み出す構造と、それが梅崎の「行き詰り」に及ぼした影響とを明らかにしたい。

1　作家梅崎にとっての「山名の場合」と「行き詰り」

第一次戦後派作家のひとり梅崎春生は、一九四六年九月に「桜島」を『素直』に発表し、同年一二月に専業の作家としての生活を始める。以降、短編小説を立て続けに執筆し、処女長編「限りなき舞踏」[6]連載終了までに、創作集『桜島』（大地書房　一九四七年一二月）、『日の果て』（思索社　一九四八年二月）、『飢えの季節』（講談社　一九四八年八月）、『B島風物誌』（河出書房　一九四八年一二月）、『ルネタの市民兵』（月曜書房　一九四九年一〇月）を出版する。

戦後派作家として順調なペースで作品発表を続けていた梅崎だが、単行本『限りなき舞踏』（小山書店　一九五〇年五月）、短編集『黒い花』（月曜書房　一九五〇年一一月）刊行の後、長編作品「日時計」（のち「殺生石」に改題、『群像』一九五〇年四月、七月、九月、一二月）を中絶するなど、創作に苦心するようになり、一九五三年一月の『梅崎春生集』（『新文学全集』河出書房）まで新刊が発表されていない。

この時期の創作について本人が言及しているのは、管見の限り以下の資料（『ルネタの市民兵』あとがき）が最初のものである。

ここに集めたのが、私のこの一年の、製作量の殆どである。この一年間は、私は一箇月平均に、三十枚位しか書けなかつた。私にとつては、それでも多く仕事をし過ぎたやうな気がする。

梅崎は後年になって、この「書けな」い時期をつぎのように語っている（「私の創作体験」『岩波講座　文学の創造と観賞』一九五五年二月）。

その後、だんだん私は書けなくなってきた。／行き詰ったといってもよろしい。／その行き詰りの原因の一半は、私の文体にもあった。自分の文体の重さが、私を書けなくした。／たとえば「日の果て」の文体は、文体のための文体と言ってもいいもので、その規格にあてはめて小説を書くためには、多少とも自己を歪めねばならぬ。／私は小説を書きながら、どうも自分は本当のことを書いていない、と感じるようになってきた。うそを書いている、デッチ上げをやっている、その意識が私の筆をさらに重くした。／昭和二四、二五年がその時期に当る。つまり私は、自分流に設定した「小説」と

いうものの枠や形式に、しばられていたわけだ。

「枠や形式」にしばられているということと、「本当のことを書いていない」という意識、このふたつの原因を、「私の創作体験」では同根の問題として語っている。戸塚はこの梅崎の自己言及から、「行き詰りの原因を、梅崎はまず文体の問題として考えた」というが、そうではない。はじめに「うそを書いている」意識があり、それが「文体」の問題として捉え直されてゆくのである。そのことは、「囚日」（『風雪』別冊　一九四九年四月）「偽卵」（『知識人』一九四九年一月）「黄色い日日」（『新潮』別冊　一九四九年五月）の三作および「限りなき舞踏」についての言及をみることで明らかにする事が出来る。まずは「囚日」「偽卵」「黄色い日日」への言及（『ルネタの市民兵』あとがき）を確認する。

「囚日」といふ作品は、私の身近に起つた事象に取材して書いた。もつと長く、百枚程度に始めは書くつもりであつた。しかし書いてゐるうちに、書いてゐる自分に嘘を感じ始めてきたので、どうしてもあそこまでしか書けなかつた。材料が重かつたのではなく、自分が信じられなかつたからである。その感じを含めて、同じ材料で、「偽卵」を書き、やはりひどく意に満たなかつた。すべてがぴつたりしなかつた。その気持や条件を裏返したら書けるのではないかと思ひ、「黄色い日日」を書いたが、これも私には満足でなかつた。そして私はこの材料を放棄することに決めた。書いてもまた別の迷路に入る予感がしたから。

こんな具合に、身近なものでも、私にはうまく書けない。

この時点での梅崎は、自身が「書けない」原因を「形式」ではなく「本当のことを書いていない」という意識であると語っている。「自分が信じられなかつた」ことが原因といい「囚日」「偽卵」「黄色い日日」での題材を放棄する梅崎は、小説が書けない原因に「別の迷路」が潜んでいる事を感じているものの、それを明確に語る事ができていない。

この「別の迷路」、すなわち「形式」の問題が前景化するのは、初の長編作品であり新聞連載であった「限りなき舞踏」においてである。単行本『限りなき舞踏』あとがきから以下引用する。

この小説は、新聞小説として書いた。形式の制約、たとへば一回何枚といふ区切り、全篇の長さの指定、題材や登場人物などについての幾分の制約、そんなものが私の筆を渋滞させたり、また屈折をさせたりした。さういふ点からの失敗は、今読み返してみても、どうも否定できないやうな気がする。

しかし新聞や小説といふものは、現代において一の有力な形式であるし、その制約はあるひは逆に利用でき得るのではないか。たとへばこの小説は、毎日三枚ずつ、約四箇月にわたつて連載された。毎日きちんと三枚ずつ、数箇月に読まれるといふことは、他の形の小説ではあり得ないことだ。だから他の小説では不可能な省略法や、また別な効果の発揚が、ここでは可能なのである。書き進む途中にそのことに気付いてきたが、実際にはこの小説には充分に適用できなかった。

やはり始めから綿密に計算し、正確に組立て、書き進めなければ無理だ。

さういふマイナスがあつたとしても、私はこの小説のいろんなところに、未だ愛着を覚えてゐる。上述の制約から書き洩らした部分、書き残した部分、などをいづれ別の形で、別のところに書いて見たいと思ふ。

ここでの梅崎は「形式」によって小説が「失敗」したことをいう一方で、その「形式」を逆に小説に利用する事を考えている。「始めから綿密に計算し、正確に組立て、書き進めなければ無理」だとして、むしろ「枠や形式」のなかで作品を創作してゆくことを目指そうとしている。「偽卵」において「材料」を放棄したのとは対照的に、「形式」の問題は放棄されることなく以降の作品創作に引き継がれてゆく。

以上、確認したように、「私の創作体験」で語られる梅崎の「行き詰り」は、「嘘」を書いている意識に端を発し、「限りなき舞踏」失敗の教訓を活かすべく「書き洩らした部分、書き残した部分」の書き直しを試みることによって長期化してゆくのである。

「私の創作体験」によれば、この「行き詰り」は「山名の場合」によって解決したとされる。

童話という形は非常に自由である。／童話、説話体、あるいは講談の語り口。／こう言う形式は、たとえば筋を飛躍させるために、在来の私の小説形式では大へんな技術的困難を極めるところを、「さて　お話し　変りまして」という一行を入れることだけで、簡単にかたがついてしまう。さっと別の話にうつれるわけだ。／この形式をとって、私は「新潮」の小説を、ほぼ一週間ばかりで、割にらくらくと書き上げた。

「山名の場合」という小説だ。書き終えてこの形式が、予想通り柔軟にして使いやすく、どの人物の心理にも入って行けるし、同時に客観的な描写も出来る、便利極まる形式であることを認識した。

「山名の場合」で「形式」についての苦悩を解消したと説明されているが、「行き詰り」のもうひとつの原因であった「嘘」の問題については、ここでは言及されていない。梅崎は「嘘」を書いている意識、という問題を、「形式」の問題の解決によって塗りつぶしてしまうのである。ちなみに、この「形式」は、椎名麟三によってつぎのように証言されている。(7)

読者は、ここで梅崎の文章が口語体にかわっているのにお気付きであろう。ある朝、私の家へやって来た梅崎は、私に会うなり「ぼくはやっと宮沢賢治に自分の行きづまりを救われたよ。宮沢賢治の口語体に」そして私はやっと彼が自分の作品の行きづまりに苦しんでいたことを知ったのである。宮沢賢治の口語体が彼の苦しみに対してどんな意味をもっていたのかについては彼は語らなかった。むろん彼がどんな風に行きづまりを感じていたかについてもだまっていた。

この、梅崎が「語らなかった」救済の正体を探るためには、「山

名の場合」に何が描かれているのかを確認せねばならない。そこで、以下、「口語体」という形式が「嘘」の問題の解決へと繋がるしくみを、主人公山名申吉とそれを物語る「私」を通じて考察する。

2　山名申吉の造形

「山名の場合」の主人公山名申吉は、「人並以下の背丈」で「まるまると肥っ」た、三一歳独身の、夜学の国語教師である。その人生は、次のように語られる。

近頃特に山名申吉は、生れて今まで、目的も志もなく、何となく生きて来たような気がしてならないのでした。やはり年齢のせいもあるでしょう。田舎の平凡な家庭に生れ、周囲のすすめるまま学校に行き、卒業して何となく会社に勤め、自分の意志でなく兵隊に引っぱられ、今はこんな夜学の教師になっている。どんな者になりたいとも思わず、人を愛したこともなく、人生の片隅でのろのろと肥り、その日その日をぼんやりと過している。どうも最初のでだしが悪かったのではないでしょうか。彼は十二人兄弟の末弟に生れ、そのせいで両親からもうんざりされ、あまり構われもせず育ってきたのです。初めから何か茫漠としているのです。（傍点ママ）

山名申吉は、両親から愛情を受けずに育ち、その結果として三一歳のこのときまで、人生に目的を見いだすことも、人を愛することも出来ずに過ごしてきた男として描写されている。そのような生きかたをしてきた自分に「そろそろやり切れなくなってきた」山名は、自身の「生甲斐」をみつけるために、「小説というものを書いてみようかな」と考える。

ところが、「もともと作家志望者では」なく、「特に文学が好きだった」わけでもない山名は、小説を「どんな風に書き出したらいいのか」分からない。同僚の五味司郎太を題材に書くと決め、「五味の場合」と題名をつけたのちにも、山名は作品本文を書き始められず、文体に悩む。

今度こそはあまり空想にふけらず、五味司郎太の人となりを、着実に執拗に描いて行かねばならぬ。前の失敗にかんがみて山名はしみじみとそう思いました。先ずこの小説の書出しは、あの巾着頭の即物的な描写から始めよう。志賀直哉みたいな文体がいいかしら。それとも坂口安吾式の奔放な文体を採用しようかしら。

このように山名が文体に悩み決めかねているあいだに、山名と五味がともに申請した科学研究費交付金の合否通知という、「いくらか運命的な日」が訪れる。山名の「本朝古代文学における愛欲のあり方について」という研究には交付金が支給されず、五味の「詐欺罪の研究」には交付されることが通知される。『『五味の場合』か。五味の場合と。そしてこの俺の場合と。俺が落っこちたのに、あの五味がパスしたということは――』」と「ひどく敏感な自尊心」を刺激された山名は、今まで空想の中で相対してきた

五味司郎太に対し、実際に「厭がらせ」をおこなうようになってゆく。

3　変容し続ける「架空の憎悪」

山名の、五味に対する意識や情熱は作中、「架空の憎悪」ということばで説明される。この「架空の憎悪」について、戸塚麻子[8]は「憎悪とは即ち、他者を憎むことによって相手を避けたり、危害を加えたりといったそれではなく、一方で相手を凝視し、他方で自らの感情を相手に強引に絡み付かせることによって、濃密な関係を築いてゆくような架空の観念である」と説明している。五味を憎む山名の「情熱」を「ばらばらに切り離された自己と現世を結ぶ力である」とし、「山名の場合」を「自己と現世」の「関係回復の物語」だとする。だが戸塚のいうように「憎悪」が「架空の観念」に過ぎないとき、「架空」の、しかも「観念」によって回復される「濃密な関係」とはなんであろうか。また、「架空」の「観念」が現実の「厭がらせ」へと発展してゆくとき、その「憎悪」は「架空」のものに留まるといえるのだろうか。

「架空の憎悪」が「厭がらせ」へと変化してゆく過程を追うため、テクストのなかから「架空の憎悪」についての記述をひろい、その感情の正体を考えてみたい。山名の五味に対する感情は、まず、次のように語られる。

山名申吉は五味司郎太を、いつかぼんやりと憎んでいたのです。

何時頃からこんな感情が、胸に忍びこんできたのか、山名自身にもよく判りませんでした。初対面の瞬間から、その感じの原形があったような気もするし、またずっと後のような気もする。どうもはっきりしません。でも初めの中はやはり、憎悪という定まった形ではなく、漠然と屈折した関心、そんなものだったのでしょう。机も隣り合わせだし、年頃も独身であることも同じだし、皆からも同類項みたいに眺められている。そのことがまず山名の意識に、微妙にはたらいていたに違いありません。同類意識。競争意識。いや、それらとも少し違う。

憎悪という感情が、「漠然と屈折した関心」から生まれたものであることが説明されている。その「屈折」は、「一方では憫笑をかんじているくせに、他方では頬が硬ばって、笑いがそのまま笑いでなくなってしまう」ような感覚だとされる。山名はまず、いつしか自身が五味を憎んでいたことを自覚し、そこから遡るかたちで五味に対する関心を抱いていたことを認知している。この、無意識のうちに憎悪へと変換される「屈折した関心」は、はじめ五味との関係性においてのみ見出されたものであった。ところがそれを山名は、自身の人間関係全体へと敷衍させて考えるようになる。

『俺はいつも架空の憎悪でもって他人につながっているのではないか？』／ある夜ふと、山名はそう考えました。彼は今まで、実際の人間を愛した記憶はほとんど無く、あるのは憎

んだ記憶ばかりでした。彼にとって、他人に関心を持つというのは、淡い憎悪を抱き始めるということでした。少くとも今までの例はそうでした。些細なきっかけで人を憎む傾向が、山名という男には多分にありました。しかし彼はそれを表現はしない。その憎しみは山名の心の中で屈折し、内攻し、いくらか変形し、そしてそこで完了する。——五味を憎み始めたというのも、つまりは五味への関心が深まってきたせいでしょうか。

山名と五味の間でのみ成立していた、「同類項」として括れるような類似性は捨象され、「架空の憎悪」は山名の人間関係形成上の特質として取り扱われるようになる。山名が五味に関心を抱きはじめた原因であったはずのふたりの類似性は「些細なきっかけ」とされ、その対照性のみが山名の中での焦点となってゆくのである。

「「ふん。五味君と僕とは、少し違うさ」」と口走る山名は、その違いについて、「自分でもはっきりしない」。教員室でもほとんど「同類項」として扱われる五味に対して山名が抱いていた「莫迦にする気持」は、そのまま自身に反射してしまうのだ。「軽んじ」ている相手と自身とが同じような存在として扱われること。そしてそれに対し、自分でも差異を言明できないこと。五味に対する関心が「憎悪」へと屈折してゆくとき、その背後には山名と五味との間にしか成立しない、この「同類項」の意識が確かに存在しているのである。

そのように考えれば、山名を小説執筆へと突き動かす衝動として機能する「架空の憎悪」とは、五味との差異化の願望である。単に五味と自身との違いを見つけ出すということではない。小説の題材として対象化し「劣性遺伝の型録みたいな」身体的特徴の「即物的な描写」をすることで、五味を「莫迦にする」こと。それは「同類項」から脱けだし、五味とは違う、より優位な「自分というものをハッキリさせる」欲望である。

ところが両者の差異化は、山名が「五味の場合」を書き始めるまえに達成されてしまう。研究費交付金の審査には五味のみが「パス」し、落選した山名は魚住浪子から「気の毒そうな」「照れたような」「憐れむような」笑いを投げかけられる。教員室内での「同類項」的な関係は、山名の欲望とは反対に、五味が優位なかたちへと崩れてゆくのである。

「先ず生甲斐を。とにかく生甲斐を！」

れいの架空の憎悪が、今夜に限って急に距離をちぢめて、なまなましく意識にからみつくのを感じながら、山名は念ずるようにそう呟き、どたんと寝返りを打ちました。

研究費交付金の結果発表の日の夜、山名は自室で「架空の憎悪」が「距離をちぢめて」くるような感覚を抱く。五味に対する劣等感を意識した山名は、「とにかく何かを早く調整しなければならぬ」と考えるが、このとき山名が調整しようとする「何か」とは、五味との「同類項」的な関係性である。教員室内で「同類項」だったとき、山名は小説を書き自分ひとりが五味を「莫迦にする」ことさえ達成すれば、優位な立場へと抜け出せると感じていた。

ところが研究費交付金支給の可否という、教員室内全体がはっきりと認識できてしまうような明確な区分が生まれたこのとき、山名はまず、五味と「同類項」的な関係性の回復を目指さねばならなくなった。「架空の憎悪」によって「五味の場合」の構想へと向かっていた山名の熱意は、これ以降、五味を「同類項」へと引き戻すために向けられてゆく。五味への関心に端を発した「架空の憎悪」は、差異化の願望を経由し、均質化への願望へと変化する。ここに通底しているのは、五味を「莫迦にする」ことへの欲望である。

五味の家でふたりが酒を酌み交わした翌日、山名は教員室で五味の顔をみ、その表情の変化のなさに怒りを覚える。

二人は顔を合わせて、ちょっと目顔で挨拶し合っただけでした。山名のはどう見てもふくれっ面でしたけれども、五味の顔はいつもと同じ表情でした。別に親しげな色もなければ、その反対の色もない。初対面以来相も変らぬ、あのぼやっとした無感動な顔付です。昨日一晩の交歓も、五味の情緒に何の影響も与えていない。全くそんな感じでした。莫迦にしてやがるな。山名も椅子に腰をおろし、不味い莫をしきりにふかしながら、何となくそう思いました。そう思うと彼はまた腹が立ってきました。

五味を「莫迦にする」ことを欲望しながらも劣等感をおぼえている山名は、反対に五味が自身を「莫迦にして」いるかのように感じるようになる。ここで、「架空の憎悪」であったものは大きく変容している。そもそも山名が五味に抱いていた「架空の憎悪」は、「現実をはみ出て誇張され、なまなましく歪められ」た、空想上の五味に対して向けられるものであり、実際に五味に相対したときには発現しない感情だからこそ「架空」なのだった。ところがここで山名が抱く怒りは、実際に向き合った五味の表情から導かれた感情である。「架空の憎悪」はその「架空」性を失い、現実の五味に対する「憎悪」となる。それに伴って山名の五味に対する働きかけも、「架空」の物語の題材にすることから、現実の「厭がらせ」へと変化してゆくのである。

このとき、「架空の憎悪」が目指していた「同類項」の回復は、「架空」ではなくなった「憎悪」によって引き継がれている。山名が五味に対して行った、あるいは行おうとしている「厭がらせ」はつぎのようなものだった。

まず、跡をつけ、その買物袋に五味が興味を示しながらも購入しなかった商品を紛れ込ませることで、五味に「神経ショック」を与え神経病をぶり返させようとする。次に、自宅の鼠を捕まえ、五味の家に放す。さらに、蠻虫を放し「雑音があると勉強ができない」五味の邪魔をすることを計画する。

このような山名の「厭がらせ」は、五味を自身と同じ状態・環境へと引きずり下ろす為に行われる。「厭がらせ」をはじめたときの山名は、自身の「神経衰弱気味の感じ」を自覚している。さらに、自宅の鼠に悩まされている。研究費申請はしたが「実は研究などは、何もしていなかった」。現実化した山名の「憎悪」は、五味を自身に引き寄せるように「同類項」的関係性を成立させようとしているのである。

その試みの尽くが失敗したとき、「同類項」への指向は、さらに変貌する。

「よし、魚住浪子は俺がものにしてやる」

盃を傾けながら、山名はしきりにそう呟き、肩を力ませていました。五味はたしかに魚住に惚れている。その五味を打ちのめすには、確かにこれは効果的な方法だ。そう思うとあの奇妙な情熱が、ふたたびむくむくと山名に湧いてくるのでした。まったく不死身な情熱でした。

五味を引きずり落ろし「同類項」を成立させようとする「情熱」は、ここでその方向性を変え、山名自身の変化によって「同類項」を目指すようになる。「人を愛したことも」なかった山名が魚住浪子を「ものにしてやる」と考えることは、自身の変革によって五味との「同類項」を取り戻そうとすることであり、他の「厭がらせ」とは異なった性格を持っている。魚住浪子というひとりの女性を同時に欲望することによって五味と「同類項」的関係性を得、そして魚住浪子を「ものにする」ことによって五味に対しての優位性を得ようとするのである。

「架空の憎悪」だったものは「架空」性を失い現実の「憎悪」として山名を「厭がらせ」に導いた。その失敗によって、五味を貶めようとする「憎悪」は山名自身に変革を促す「情熱」へと変換された。もはや山名は、小説という「架空」の舞台で五味を「莫迦にする」ことによっては「自尊心」を満たせない。魚住浪子という第三者による評価を獲得し、現実において五味に対し優位性を持つことを指向する「情熱」が、山名を突き動かすのである。

4　「同類項」を「莫迦にする」こと

このように、山名が「架空の憎悪」を次々に変形させていったために、遂に最後まで書かれることのなかった小説「五味の場合」は、本作の終末部で、次のように語られる。

机上の原稿用紙は、『五味の場合』という題名だけが記されたまま、うっすらと埃をかぶっています。電燈の光はそこにもあわあわと落ちています。この『五味の場合』という小説は、おそらく題名だけで、中味は永久に書かれないのではないでしょうか。どうもそんな気が、私にはします。もうその必要も、山名にはなくなったでしょう。

山名にとって、もはや「五味の場合」が必要でなくなったことは先に述べた。ここで問題となるのは、この書かれなかった「五味の場合」をみつめる「私」の存在である。「山名の場合」は全体がこの「私」によって物語られる小説であることはいうまでもないが、改めて、山名によって構想された「五味の場合」と、「私」に物語られた「山名の場合」とを見比べてみたい。

まず五味司郎太のことから始めましょう。

五味司郎太という男の頭は、ちょっと一風変った、なかなか印象的な形をしています。一目見ると忘れないほどです。

どんな形かと言うと、つまり左右にだけ拡がっている。うしろは平たく切り立っている癖に、前から見ると、不自然なほど鉢が開いている。灰色がかった毛髪が、そこら一面にぼやぼやと密生していて、いわゆる巾着頭というやつです。

「山名の場合」は、このように、五味についての記述から始まる。この書き出しは作中、山名が構想した「五味の場合」を忠実に引き受けて書かれている。山名は五味の「巾着頭の即物的な描写から」、「五味の場合」を書き始めようと考えていたのだ。「私」はその構想をそのまま用い、「山名の場合」というタイトルにも関わらず、五味についての描写を始める。五味司郎太について、容姿に止まらず、酒に強いことや授業の評判などまで書き連ね、その五味と「いい対照を」なす存在として、ようやく山名申吉が登場してくる。

「山名の場合」の主人公は山名申吉である。にもかかわらず、その作品は山名自身の構想に従って書き出される。読者はそのことを、どう考えれば良いだろうか。以下、「私」が山名の構想を引き受け、山名にとって「小説」が効力を持たなくなる地点までを語っている、ということを検討していきたい。

繰り返しになるが、山名が「小説というものを書いてみようかな」と思うのは、「生甲斐」をみつけ、「自分というものをハッキリさせるため」だった。そして「架空の憎悪」に突き動かされるように題材を五味に定め、「五味の場合」の構想を考え始める。山名が「自分というものをハッキリさせる」ためには、自身と「同類項」の五味を題材にする必要があったのである。

山名がこの構想をしていたとき、小説によって「ハッキリ」させようとしていた「自分というもの」は、五味に対して優越性を持つ「自分」だった。「私」が引き受けたのは、こうして成立した『五味の場合』の書き出しである。必然的に、「山名の場合」冒頭の五味司郎太についての「即物的な描写」は、五味を「莫迦にする」かのようになされてゆく。

ところが「私」は、山名の意図を裏切るように、その五味と山名とを「いい対照」としてまとめて登場させる。「山名申吉（肥って若い国語教師です）」と注意書きつきで語り出すとき、私が「即物的な描写」で「莫迦にする」対象は五味と山名の両者へと拡大する。「山名の場合」の読者がユーモアをみいだす仕掛けは、「私」が山名と五味を「莫迦にする」この書き出しによって既に準備されているのだ。「五味の場合」を改題し語ることで、「私」はここから、山名を「莫迦にする」為の小説「山名の場合」をつくりあげてゆく。

作中、「私」は様々な価値判断を差し挟みながら、登場人物の内面を自由に覗きみる、極めて饒舌な語り手として立ち現れてくる。その意味で「私」は、人格を持ちながら山名や五味といった登場人物たちとは明確に隔たった存在である。ところがそれでも、「私」は作品全体を掌握し自由に統御できるわけではない。それは、「山名の場合」が「五味の場合」を引き継いだことによって引き起こされるのである。

対象を「莫迦にする」ために小説を書く、という山名の構想を踏襲する「山名の場合」は、必然的に、山名のその発想を内包している。「五味の場合」が山名にとって意味をもつのは、山名と

五味とが「同類項」として扱われている間のみであること、そしてその「同類項」の崩壊によって「五味の場合」が書かれなかったことはすでに述べた。それを当てはめて考えれば、「私」にとって山名申吉が物語る意味をもっているということは、そのまま、「私」と山名との間に「同類項」的関係性があることを示唆しているのである。

「私」は「もうその必要も、山名にはなくなったでしょう。」と「山名の場合」の物語を閉じる。このとき、山名を小説へと向かわせた「架空の憎悪」は、山名自身に変化を促す「情熱」へと変じていた。ここで物語が閉じ、山名・五味・魚住の関係性が語られないのは、「山名の場合」という小説の有効性が対象と語り手の「同類項」的関係性に担保されているからに他ならない。つまり、五味が研究費交付金を受けることによって「五味の場合」が効力を持たなくなるのと同じく、山名が自己変革をはじめることによって「山名の場合」はその有効性を失い、「私」は「同類項」でなくなった山名を語り「莫迦」にし得ない存在になるのである。作中、自在に登場人物の内面を語っていた「私」は、終末部で、眠る「肥った男」山名申吉を眺める。もはや「私」は登場人物の視点を自在に借りうけながら作中世界を眺めその内面を描写する語り手ではない。「電燈を消し忘れた」山名の部屋で、その「全く健康そうな、むしろ無邪気な感じの寝顔」を自身の視点でそっと覗き込む「私」には、山名に今後「五味の場合」を書くつもりがあるかどうかを知るために山名の内面に入りこむ、といった語り手の特権的な行為が出来なくなっている。「どうもそんな気が、私にはします」と自身の予想を書いて語りを閉じる「私」は、「情熱」をもった山名からは隔てられてしまっているのである。

5　「嘘」と「形式」の問題

さて、このように「私」が「山名の場合」を物語る構造を確認した上で、今度はその効果について考えてみたい。小説を書けない（あるいは書く必要のなくなった）山名を「私」が小説化する構成が、梅崎の「行き詰り」、つまり「嘘」と「形式」の問題をいかにして解消したかを考察してゆく。

椎名麟三によって証言された、「宮沢賢治の口語体」というこの作品の文体と、実際賢治から受けた影響については、和田勉が「賢治童話の一つのパターンである、強者に対する弱者の立場からの一種のユーモアを含んだ批判・諷刺を摂取している」と指摘し、宮沢賢治のさまざまな童話と梅崎との共通点を具体的に分析している。諷刺という手法のみならず、「「お話し変わりまして」式の話の展開」、「「ですます」の口語文体」、「センテンスが長く、豊富な形容詞や比喩が多用されている」ことなど、梅崎が宮沢賢治からうけたのではないか、と考えられうる要素を詳細にまとめている。だが、和田自身が「梅崎が見たのが、どの程度なのかによって対象となる賢治の作品も変わるが、それは、梅崎の蔵書目録が今後公開されたりすることによって明らかになるであろう」と述べるように、梅崎が宮沢賢治のどの作品から具体的にどう影響されたのかを確定させることは出来ない。

本稿ではその詳細に踏み込むのではなく、文体に影響を受ける

ことによって「行きづまりを救われた」というそのこと自体に焦点を当てたい。口語体という文体を得ることによって「山名の場合」は書かれ、文体に悩んだ結果「五味の場合」は書き始められなかったのである。山名や「私」と梅崎とを短絡的に結びつけることが目的なのではない。小説が書けないということが「山名の場合」においていかに描写されるかを確認することで、「嘘」の問題へと踏み込んでいこうという試みである。

山名は「五味司郎太における人間の研究」という題をやめにして「五味の場合」と名付けたあと、その文体をめぐって数日悩む。「五味司郎太の人となり」を書くと決めている山名の筆を停滞させているものは、何を書くかということでも、何から書き始めるかということでもなく、どんな文体で書くか、という問題だった。

この悩みが解消される前に研究費交付金の通知の日を迎え、五味から「詐欺罪の研究」という研究題目を聞いた山名は、「原稿用紙に書かれた『五味の場合』という文字」を思いうかべる。この日から、山名を小説の執筆へと向かわせていた「架空の憎悪」が「同類項」的関係性の「調整」へと目的を変ずることは先に確認した通りだが、内部の「架空の憎悪」が「何時頃から」芽生えたものか自覚できなかったように、山名自身はその変化に対して敏感ではない。ただ、「詐欺罪」「人間のインチキ」という五味の研究内容を聞いた山名の意識には、文体で悩んでいた小説「五味の場合」が浮かび上がるのである。

山名は直後、「一献酌み交わしたい」と五味を誘う。「私」はそのことばを補強するかのように、次のように語る。

二三日前に思い立ったということは事実でした。『五味の場合』を書き始めるには、まだまだ材料不足で、もっとデータを集めねばならぬことに気が付いたのです。

この「私」の補足によって、「五味の場合」を書き始めなかった理由が、山名の中で、どんな文体で書くか、ということから「材料不足」へとすり替えられていることが明らかになる。「山名の場合」という作品内において、どんな文体で書くかという「文体」についての悩みは、「詐欺罪」「人間のインチキ」を差し挟むことによって「材料」の問題へと置き換わっているのだ。

「詐欺罪」「人間のインチキ」を研究する五味に、自身が「何の影響も与えていない」ことを感じ「架空の憎悪」を現実の「厭がらせ」へと転換する山名は、「架空」の物語である小説が書けない存在として設定される。「私」はその山名を語り「莫迦にする」小説の主人公に据えることのできる存在であり、それが「同類項」的関係性に基づくことは既に述べた。ところがその「私」の「架空」の優位性は、物語終末部で突然に失われる。山名に興味を持たない五味が研究費交付金の受給によって山名との「同類項」を意図せず脱けだしたのと同じく、「私」を認知し得ない山名は魚住浪子を欲望することで「同類項」から脱けだしてゆく。「私」は「莫迦にする」ための小説「山名の場合」を物語ったことで、「五味の場合」を必要としていたときの山名と「同類項」の位置に取り残されるのである。

このように考えたとき、小説という「架空」の世界を構成することが出来るか否か、ということの価値は反転する。「人間のイ

ンチキ」を研究する五味は社会的な評価を得、小説が書けなかった山名は自己変革の契機をつかみ、「山名の場合」を語り得る「私」は「莫迦」にされる位相に取り残されるのだ。

山名と「私」との差異は、小説が書けるかどうかであった。山名は、「文体」についての悩みを「材料不足」の問題へと変換し「データを集めねばならぬ」と考える。一方で「私」は登場人物の内面に自在に踏み込みあらゆる価値判断を附け加えながら「莫迦にする」。この「私」の自在さこそ、梅崎が「便利極まる形式」と呼んだ「童話、説話体、あるいは講談の語り口」、つまりは「宮沢賢治の口語体」である。「志賀直哉」や「坂口安吾」の「形式」では語りえなかった五味司郎太は、「口語体」という「形式」によってはじめて語りうる存在となる。

五味は、「人間のインチキ」を「研究」している。それを知った山名が「五味の場合」を思いうかべ「データ」を集めようとしたように、「架空」の物語である小説が「インチキ」でなくなるためには、「材料」を集めて書く、という山名が採用したような方法が浮かぶかも知れない。梅崎もまた、「身近なもの」を題材にとり、「嘘」の意識を克服するためにその「材料」を何度も書き直している。ところが「私」は「口語体」という「形式」を用いることで、五味の内面にまで踏み込み、自在に「山名の場合」を語ってみせる。「人間のインチキ」を「研究」の題材として対象化する五味を理解し語ることが、「データ」を収集することでは達成できず、「口語体」の導入によってしか成し得ないこと。それは、「身近なもの」を小説にするために生じる「嘘」が「材料」の収集ではなく小説の「形式」によってのみ解消される、という梅崎の問題と結びついているのである。

さらにこの問題は、文体に悩み小説が書けない山名からも考えることが出来る。誰の文体で書くか、という山名の悩みは、五味の「人間のインチキ」の研究を経由して「材料不足」と描写されるようになり、とうとう「五味の場合」は書かれない。「嘘」を突きつけられないために「データ」を集める山名は、「架空」の作品を描くことが出来ない。「身近なものでも、私にはうまく書けない」と語った梅崎の悩みは、ここで否定される。「データ」があっても書けないのではなく、「データ」が揃うと「嘘」の意識に囚われて書けなくなるのだ。そこには現実と「架空」の小説との間に横たわる、乗り越えがたい断絶への意識がある。そしてそのような、小説の「材料不足」を問題として捉えそのために現実の「データ」を集めようとする、この解決に繋がらない苦悩は、文体、つまり「形式」についての悩みがすり替えられることで発生しているのである。

梅崎は、「形式」の問題の解決によって、「嘘」の問題を塗りつぶす。それは、「嘘」の問題に行き当たった時に感じた「別の迷路」、すなわち「形式」の問題こそが「行き詰り」の原因であったという認識にたどり着いたということである。梅崎が「口語体」という「便利極まる形式」に「救われた」のは、それが現実の「データ」を必要とするような「即物的な描写」を必ずしも必要としないからなのである。

おわりに　「憫笑」の対象

最後に、はじめの問題設定に戻ろう。読者に「ユーモア」「ニヒリズム」を読み取らせる、本作の仕掛けを確認しなければならない。

「山名の場合」から読者が「ユーモア」を読み取るのは、「私」が全体を通して、登場人物たちを「莫迦にする」ための「架空」の物語を語っているからである。それは、五味を「莫迦にする」ために組まれた山名の作品構想を、「私」が借用することによって引き起こされていた。その「笑い」を、読者は「私」と共有しながら読み進める。

一方で「ニヒリズム」は、むしろその「ユーモア」の前提となる「私」と山名の「同類項」的関係性が崩壊するときに立ち現れる。それまで「莫迦」にしてきた山名の自己変革の萌しによって「私」が取り残されたとき、「私」とともに山名を観察してきた読者もまた、「架空」の小説の登場人物であるはずの山名を「莫迦」にできなくなっている。読者は最後まで読み切ったとき、はじめて「莫迦」にしていた山名と自身との「同類項」があったことに思い至る。いままで「莫迦」にしていると思っていた「笑い」が、山名が五味をみるときのように、「頬が硬ば」るような、自身に反射してくる「憫笑」だったことに気が付くのだ。

梅崎春生は「口語体」という「形式」、つまりは「材料」を必要としない「私」という手法を手に入れたことで、現実の読者と「同類項」を結びうるような「架空」の登場人物を描写できるようになった。現実の「材料」を集めて小説化することからは離れ、むしろ小説を「架空」のままでおくことで、「嘘」の意識からはじまったスランプを脱けだしたのである。

注

(1) 伊藤整「活躍した人々と作品」(『創作代表選集』日本文芸家協会編　大日本雄弁会講談社　一九五二年四月)

(2) 浅見淵「解説」(『新選現代日本文学全集』筑摩書房　一九五九年一〇月)

(3) 平野謙「解説」(梅崎春生『ボロ家の春秋』角川文庫　一九五七年二月)

(4) 高橋啓太「梅崎春生の市井小説とその可能性」(『日本近代文学会北海道支部会報』二〇〇二年五月)

(5) 戸塚麻子「ニヒリズム超克の試みとその挫折（一）――梅崎春生の一九五〇年前後の私小説的作品群、及び可能性としての『山名の場合』――」(『日本文学誌要』二〇〇〇年三月)、戸塚麻子「ニヒリズム超克の試みとその挫折（二）――梅崎春生に於ける〈フィクション〉の破綻と政治への視線――」(『日本文学誌要』二〇〇一年三月)

(6) 「限りなき舞踏」(『西日本新聞』『北海道新聞』一九四九年九月～一二月)

(7) 椎名麟三「解説」(『梅崎春生全集』第三巻　新潮社　一九六七年一月)

(8) 戸塚麻子『戦後派作家　梅崎春生』(論創社　二〇〇九年七月)

附記

本稿における小説の引用は、全て『梅崎春生全集』第三巻（沖積舎　一九八四年七月）に拠った。また、引用部における傍線は全て論者によって付された。

（わたなべゆうた　大学院博士前期課程在学生）